

試し読み

豚を捌くように

知古文庫

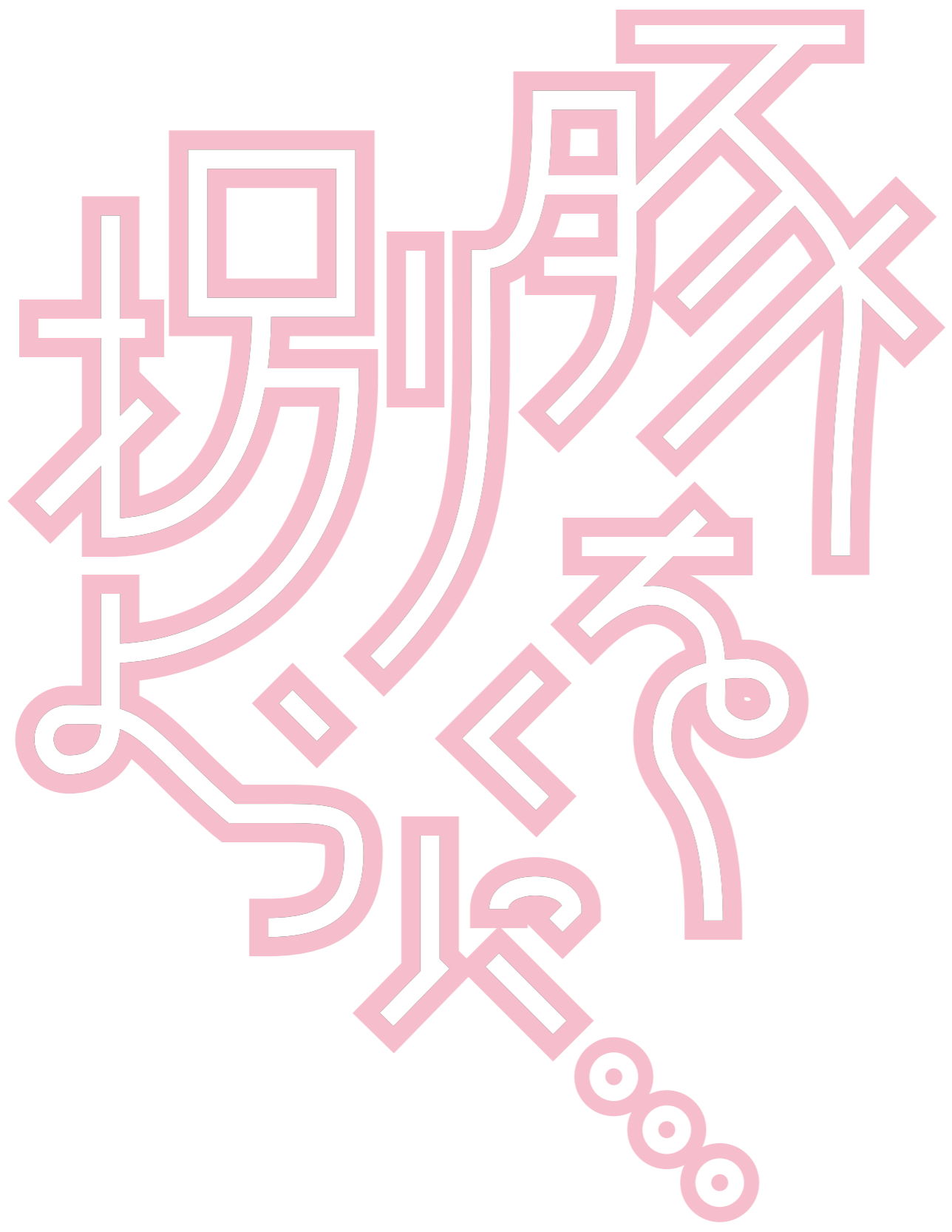
当ファイルを許可無く印刷またはインターネットを介して
第三者へ配布することを禁じます。

お母さん、 お父さん、 お兄さん、 お姉さん、 お友達、 おじいちゃん、 おばあちゃん、 みんな、 大好きです。

作
いかるがつみき



知古文庫



作
い
か
る
が
つ
み
き

私の隣には、肌色をした塊が転がっていた。目が覚めたばかりの、すこしまどろんだ状態だったので、これがなんなのか、一瞬驚いたけれど、これは人間だ。労働で体力を消耗しきって、ほとんど使いものにならなくなっている人間の塊だ。動物的運動から隔離されて、一箇所に座ってばかりいる、身体的機能が低下した人間だ。なのにもかからわず、昨晚、私と十分にいちゃついた人間だ。重力に負けて、とっても奇妙な形で横たわっているけれど、たぶん、これは人間といわれているものだ。

「ねえ」

話しかけてみても、すこし寝返りを打つくらいに応答。それが返答。とうとう私はこの存在の生命性を疑った。だけど、まあ、朝起きてあの人以外の人間が横にいるなんてサスペンスだし、人間大の人間以外の物体と一緒にベッドで寝ていたなんて思うとホラーだ。

「ちよっと太った？」

あの方はシステム系の技術者で、いつも帰りが遅い。いつも仕事に追われている。そんなものだから、つきあっているものの、会える時間がひどく少ないうえに、繁忙期には、一緒に出掛けていても始終ウトウトしている始末。つきあって3年経ってもそんな状況が変わらないので、私は業を煮やし、実家を出て、一緒に住むことにした。……だから、やっぱり、このブロックの生肉は、あの人なんだ。

遠慮もなにかとあるけど、好きな人と一緒にいられるのは嬉しいし、生活費は浮くし、お互いの健康のことも気遣えるし、なんていうか、しあわせな配慮？ それに、こうやって寝食ともにしておけば、いつハンコを捺して、新しい門出が訪れることになっても、すぐに対応できるはずだ。いずれは伴侶に。

「はやめに考えなさいよね」

だけど、考えてみれば、眠っている以外は、ほとんど時間を共有していない。人生の3分の1は寝ている時間だと云われるけれど、その眠っている時間が一緒にいるほとんどの時間。顔を合わせている時間なんて、人生のパーセンテージの中ではかなり低い割合。あの人は相変わらず忙しい。自分のことを「社畜」と呼んでいる。自虐で云うなら余裕があるけれど、あの人を見ていると、そのとおりだと思えるから心配だ。

横たわっている姿は変な形。じっと見詰めていると、ゲシユタルトとかが崩壊しはじめて、さらに滑稽な姿。はだけたところから見えるピンク色の素肌……ああ、人間って、やっぱり肉なんだな。その不格好に寝転がった姿は精肉店に吊された肉の塊のようでもあったし、今の時代はスーパーで切り身にしてパックに詰められている肉、そっくりだ。食肉だ。食べる肉だ。食べられるだけに産み落とされ、食べられるために命を落とすし、皮を剥がされ、食品として並べられ、消費されるのを待



つだけの、生きていたときの姿からは考えがたい形の、商品としての肉だ。画一的に金銭的価値をつけられてしまった、部位の名前で呼ばれる肉なのだ。

焼いて塩でもふったらおいしいかな……？　じゃあ、あの人は、さながら家畜かな。

「まるでしかばねのようだ」

たしかに、今の時代の人類は畜産物なのかもしれない。

あの人は日がな機械がカタカタ正常に動くようにアレコレしている。そしてクタクタになっている。機械たちが、物理的に消耗するのは想定内の範疇なので、メンテナンスの周期もはじめから計算されている。だけど、それを管理する人間のほうの消耗は算出されていないようだ。まあ、労働基準とかがそれにあたるのかもしれないけれど、あの人の生活を見ると、そんなものはあつてないようなものだとわかる。人間が自分の時間を厭わず機械の面倒をみている。機械の家畜になっているんだ。

昨日はあんなにたくましく稼働していたのに……指でつつくと、けだるそうに呻り声をあげて寝返りをうつ。肩をすぼめ丸まり、だらり横たわる背中。

もう、100グラムあたり88円のヤツはほうっておいて、朝食のトーストを焼いていたら、急に目が覚めたようで、こちらの様子を窺っている。

「たべる」

つぶらな瞳。まさに畜産物のよう。



「ごめんねー。この前の伝票ー。」

あんな単純なのー……、私ってー、なんだか、おっちょこちよいなのよねー。

……じゃあ、その件は来週までってコトでー。

溝口くんも、忙しいと思うけど、がんばってねー。

またねー」

私は商社で事務員をしている。

「アンタ、いいかげんにしたほうがいいわよ」

「なにがですか？」

「なにって……」

どんな会社？と訊かれても、特徴もない、応えようのない平凡な会社だ。そんなにおおきな会社ではないことは、この貸しビルの立地の悪さ、窓から見える景色の悪さからしてわかると思う。手広く、多彩な商品を……というか、ウリになるよう



な商品もないので、取引先の云うことをイロイロ聞いていたら、あれもやる、これもやる、便利屋みたいなよくわからない会社になっていた。しかも、儲からないような仕事ばかり。

私のいる業務課は、課長ふくめ3人の部屋で、これまた平凡な事務的業務を日々こなしている。まあ、具体的には、このパソコンとか呼ばれている物体を使って、計算とか、入力とか、レーザーカラープリンタで印刷とかする仕事だ。

「若葉、居る？」

「はい？」

「この前の書類ありがとねー。でも数字間違ってたよ」

「えー、本当ですかー？」

確認したんだけどなー……」

「まあ、直しておいたけどさー。次は気をつけてよねー」

「おとといのですよねー。あれ、朝からずっと入力しててー、午前中って、おなか減っちゃって、フラフラしちゃうんですよねー。なんかー、目の前がふわーとしちやってー……」

次からは気をつけますー」

隣の席の山田先輩は私とおなじ入力の仕事ばかりやっている事務員。人事異動に

引っかかることもなく、もう10年くらいこの部署にいる。キャリアの差を差し引いても私との能力差は歴然で（それは私の能力が低めだということを考慮したとしてもバリバリで）、会社側も先輩の力を高く買っているのがわかる。

「……なんなの」

「なにがですか？」

「やりすぎ」

「え」

「まあ、いいけどさ」

隣の机から響く、リズムカルに押下されたキー音。キーボードの左側に書類を置いて左手でページをめくりながら、まったく速度を落とすことなく、絶えまず入力が続いている。ピアニストが弾いている途中で、さらりと楽譜をめくるようなやつ。ってというか、もう、工場のようにスムーズな流れ作業。ちょうど手を伸ばしたところにマーカーがあって、これまた入力の流れを妨げることなく書類にチェックを入れていく。

「たべる？」

「あ、ありがとうございます。いただきます」

山田先輩は、首の角度をモニタ正面に見据えたまま、ほとんど動かさない。淡々



と減っていく書類の山……

「これ、どこのコンビニですか？」

「ん？ 駅前の」

そういえば、学生のころのマラソン大会を思いだす……マラソンは、序盤から差をつけられてしまうと、どうしようもない。私は、「走る距離はおなじなんだし、最初にトばしたやつらなんて、そのうち疲れてくるだろうな」「だから、しまいにはおなじくらいの順位になるだろうな」……なんて高を括る。それよりも、自分のペー
スを守るように、「楽しむことが一番大事なんだ」とか優等生チックなことを考えながら、冷静に走ろうとする。けれど、いつになっても差は縮まらない。それどころか、終盤に差しかかるころには、絶望的な差がついていて、どれだけ全力をふりし
ぼっても、もう絶対に追いつけないことを悟る。

「どれくらい進んでる？」

「半分くらいですかね」

「ふーん……」

「遅くてすみませーん……」

「……だいたい、これくらいの入力だったら、新しいソフトとか入れればさ、自動でなんとかかなりそうなんだよね。」

なにをわざわざ手入力なんだろうね」

「支社長が、このソフトじゃないと『見づらい』って怒るらしいですよ」

「はッ……どーでもいい」

「近いうちに、このアンケートの案件、マークシートになるんじゃないですかね」

「支社長は」

「もう長いですから、そろそろ」

「ああ、移動かしらね」

「そしたらね」

私の3倍……いや、5倍はこなしているかな。入社してすぐ、絶対に到達できないであろう神業を見せつけられてしまったものだから、私は頑張る気力を無くしてしまった。というか、才能の問題とかあるし、べつにああなりたいとも思わないし。まあ、ゆとり世代だし。

先輩がバリバリ仕事している姿は、カッコイイとは思うけど、動きがそつなさ過ぎて（無表情だし）、ときどき怖くなる。まるで機械なんじゃないかと思えるくらい完璧な動きをする。つい「先輩、子どものころに秘密結社につれてかれて、体を改造されたことかありませんでした？」とか訊いてしまいそうなくらい。それに……先輩の、ネイルもケアもしていない爪とか、指輪もなにもしていない手を見ると、



あの手は、もう、だれかをあたためてあげることもないのだろうか、入力するためだけに特化してしまった専用工具のようで、なんか寂しい。

「アンタ、なにか考えてるの？」

「え？」

「まあ、こんな話、してもしょうがないけどさ。

この会社だって、この先を考えるとね」

「発展はしなさそうですね」

「せめて現状維持してくればいいけどね。アンタはまだ若いんだしさ。考えておいて損はないよ」

「先輩は？」

「あたしは、もう、どうかなー……」

「先輩は、仕事できるじゃないですか」

「関係ないわよ、事務員なんて。

しかも年齢のこと云われたら、さ。

「凄腕の弁護士でも雇わないと反論もできやしないわ」

山田先輩って、ちよっとものの云いかたがキツいけど、サバサバしていて、話しやすい。私生活にはほとんど介入してこないし（まあ、お互い興味もないのだけど）

一緒に仕事していて煩わしいタイプの人じゃない。

だけど、一緒に仕事していない私以外の人には、仕事を淡々とこなすマシーンみたいな先輩の姿は、冷たい人のように見えているんだろうな。あれは勤勉だから身についた能力なんだろうけどな。愛嬌が乏しいってのも、問題あるのかもな（女は愛嬌だなんてだれが云ったんだ）。

私自身、最初は先輩が恐ろしかった。光速級の速さで仕事をこなしていくし、高卒の学力すら怪しい私にとっては、なんでも知っていて即座にズバズバ応えられる先輩は、ディフェンスよりオフENSEを重視して、守りが弱いのは弱点だけれど、攻撃しつづけていればそれが防御になるでしょうスタンスの、アグレッシブなスポーツ選手のように、ひどく攻撃的に思えた。だけど、慣れてしまえば、なんてことはない。それに、たとえマシーンだったとしても、それは忠実に仕事するだけの存在なのだから、べつに危害をくわえられるわけでもないんだし。

むしろ、仕事をする仲間として、これほど頼もしい人もいないと云えるんだ。私みたいなテキトーなヤツの隣には、こういう人が居て欲しい。職人気質？ いぶし銀な感じの、頼れる人が。

それに、スキが無いように見えて、じつはオトメだし。ペンケースとか、手帳とか、やたらとレースっぽいのがついたガーリッシュなモノを使っている。しかも、



それを他人に見られるのが恥ずかしいらしく、こそこそ隠しながら使っている。「そこにはふれてくれるな」って雰囲気かもしながら。……なんか、カワイらしい。その隠れた愛嬌に気づくと、機械のような山田先輩にも人間味を感じるんだ。マシンはマシンでも、外装はブリキなんじゃないかな。

「……いちおう、資格とろうかな、とか思ってます」

「それがいいわ……」

「若葉さん、居るー?」

「はいー」

「会議資料、一部足りなかったから、急いで追加お願いできない?」

「ああー。ごめなさーい。今すぐー……」

「まったく、しょうがないなー」

「あ、そういえばー。このまえ野々村さんに貰ったデパ地下のチョコ、すっごくおいしかったですよー。みんなにも大好評でー。受付の矢部さんなんて、目をキラッキラ輝かせてましたしー」

「あ、そう? じゃあ、また買ってこようかな」

「ぜひぜひー。また、ごちそうして下さいよー」

「えー……じゃあ、また今度ね。」

……っというか、コピー」

「あー。すみませーん」

私が営業のYESマン(野々村)とやりとりしているあいだでも、山田先輩が奏でる軽快なキーボード音は殿むことなく続いていた。まじめだなあ……

「アンタ、人事のコたちから評判悪いわよ」

「なんでですか」

「その、ブリッコがでしょう」

「ブリってるわけじゃないですよ」

「いやあ……アンタの思想はわかってるけどさ。」

「そうにも見えるってコト」

「見る側によつては、ですよね」

「まあね。」

「だけど、オンナってヤツらは、あることないこと、さ……」

考えたところでしょうがないといつても、この会社がいつまでもつかない……なんて考える。だいたいこの大不況下において、いつまでも私たちの仕事(いわゆる雑務)に人を裂いている余裕なんてあるのだろうか。

これだけ忠実に仕事にマシン化している先輩が、最近ちらほら将来のことを話



すようになって。業務をこなすことのみには忠実な先輩が、だ。ということは、それだけ以前より景気も待遇も悪くなっている証拠だろう。それとも先輩もそろそろ身を固めたりとか……それは無さそうだな。

「ちよつと、セーブしたほうがいいって云ってるの」

「だって、だれにも迷惑かけないじゃないですか」

あんなことを云いながらも、山田先輩だって、いつ転職する気を起こしてもおかしくないと思う。先輩はもっと活躍できる場所と待遇があるはずなんだ。それにくらべ、うちの部署なんて、だれが変わったところで、どうってことない仕事ばかり……だけど、隣に頼れる人がいなくなるのはイヤだな。

「まあね、むしろオトコたちのほうは喜んでるわ。」

結局、そういうオンナ、好きだから」

「じゃあ、いいじゃないですか」

「アンタのことを思っただけで云ってるのよ」

「ふっ、先輩が？ 私を？」

「あのねえ……アンタのそういう態度、勘違いするオトコ、いっぱい出てくるよ。」

ちよつと笑顔をするだけで、『オレに気があるのかな？』とか。『オレのことが好きなんじゃないかな？』とか。

馬鹿なヤツなんて、いっぱいいるんだから」

一番イヤなのは、人がいなくなるってことよりも、辞めたりしたときに、だれも補充されないこと。それじゃなくても、景気先行きドン詰まり、人件費削減が共通言語のように飛び交うご時世。売り上げが減れば作業量は減るし、私たちの事務作業も減るもんだから、人を減らして、そのぶんをだれかのサービス残業にねじこんでしまえば、それで、どんどん人件費が削減できる。

「でも、私カレシいますし。年下で、カワイイのが」

「他人のものだからといって、遠慮するとは限らないでしょう。万引き犯だって、銀行強盗だっているのよ、この世の中には」

「物騒ですねえ」

「……だいたい、オトコなんて、アレがおっ起っちゃったら、どうしようもないんだから。猿なんだから」

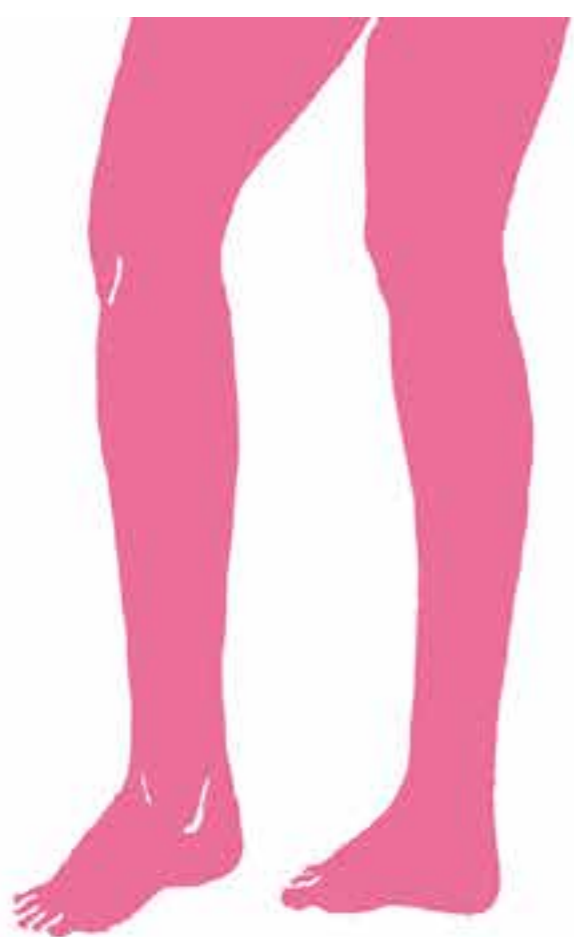
「午前中からシモですか？」

「はッ。それも勤務中にね。オフィスでね」

「課長、外出でよかったですね」

「いいわよ、課長くらい」

「傷つきますよ」。課長、女性にたいして、けっこう幻想もってる感じですから。



あの歳で。

それに、今年大学卒業の娘さんなんて、自分じゃ『箱入りに育てた』って溺愛してますし」

「イマドキの大学生なら、することシてるでしょ」

「むしろ、シてますよね」

いずれ訪れるだろう会社の終末……それは、すぐそこまで迫っているようで、結構さきのような気もする……意外としぶといかもしれないな。売上げが無くなっても、ドンドン人を減らして行って、最終的には社長と常務とかで、細々やっているかもしれないし。

そのころには、もっとすごいパソコンが開発されていて、いろんなコトが、もっと速くなっているかもしれない。人に変わって、人型ロボットとかがロボットアームで入力作業していたりして。でも、それは味気ないな。せめて、山田先輩の顔した、山田先輩ロボがきてくれればマシだけど。

「はい、業務山田です……、
……若葉」

「はいっ？」

「また二課の溝口から」